

# 論理的な可能性について

宮崎 和人

## 1. 英語と日本語の可能表現

英語の助動詞CANと、語彙=文法的な表現形式BE ABLE TO(do)および助動詞MAYは、可能表現として、ある種の用法を共有しつつ、明確な対立点を有していてもいる。

渡辺(1989)によれば、能力可能や条件可能といったALETHICな可能性(主体の内的な特性としての、あるいは、ものともとのあいだの関係の特性としてさしだされる可能性)をあらわす用法を共有する、CANとBE ABLE TO(do)には、

BE ABLE TO(do)は、過去、現在、未来の時間における可能性を表現することができるのだが、同時に、それぞれの時間において、その述語の動作・状態が実現することもふくみとして表現する。したがって、おおくの場合、特定の時間で、その場かぎりのできごとをあらわして、現実表現の文へ移行している、とみることができるであろう。一方、CANは動作・状態の可能性だけを表現していて、その実現についてはなにもいってはいない。日本語の「することができる」が、とくに過去形において、特定の場面をさしだすとき、しばしば、動作・状態の実現を表現しているのだが、BE ABLE TO(do)の過去テンスの形式はその日本語の形式に対応できても、助動詞CANの過去形couldはそれに対応することはできないのである。現在形canも、現在の時間のなかで動作・状態が実現していることをふくんで表現するときには使用することはできない。(渡辺1989: 229-230)

といった違いがあるという。

また、渡辺によれば、DEONTICな可能性(社会的なノルマ、つまり、習慣、慣習、法的な拘束性、道徳的な規範などの観点からの可能性)をあらわすCANとMAYには、次のような違いがあるとされている。

そして、助動詞CANが、はなし手の論理、都合の観点からではなく、自分の外にある、社会的なノルマの観点から可能性をとらえて、許可のあり・なしを表現しているのに対して、助動詞MAY、MUST(NOT)の場合は、はなし手自身が許可や禁止の指示をさしだす権威主体(authority)である。規則などの文面のかき手は、社会的なノルマの権威主体である。あるいは、その代行者なのである。そのため、助動詞CANは、現在・未来/過去のテンスの対立をもっていて、過去の時間で許可のあり・なしも表現することができるのだが、助動詞MAY、MUST(NOT)は、現在・未来のテンスだけで、過去テンスはみあたらない。

助動詞CANは、はなしのなかで、はなしあい手がなんらかの課題に直面していて、それを解決しようとしているとき、その解決策として、なんらかの具体的な動作が可能であること、ゆるされることを表現することができる。そのとき、主語は具体的なはなしあい手の二人称で、述語にあらわれる動詞(形容詞)は

主体の意志的な動作・ふるまい、などをさしだしている。しかし、その許可は、はなし手の都合、はなし手の論理の観点からさしだされるのではない。はなし手は、〈その課題の性格にてらして、あるいは、その背後にある、状況的な条件、一般的な、社会的な規範にてらして、その行為がゆるされるものであること、容認されるものである〉、という意味で、許可をさしだしている。はなし手の立場は、その課題の論理、一般的な、社会的な論理の背後にひきさがっているのである。(渡辺1989: 236)

この、具体的な場面での許可の表現は、助動詞MAYでも表現されて、口語では、両者は、MAYの方がていねいで、格式ばっている、ということのほかは、区別なく使用されているようである。しかし、はなし手の論理、はなし手の都合の観点から、はなし手自身の権威主体としての立場をあらわにした許可は、(中略)助動詞MAYで表現されるだろう。(渡辺1989: 237)

そして、渡辺は、「文があらわす対象的な内容そのものが成立し、存在することができるか、どうかの可能性の判断を表現する」といった、EPISTEMICな可能性をあらわす用法がCANにもMAYにもあることを指摘し、両者の違いについては、

しかし、このMAYの否定の形式は、CANの場合とはちがって、可能性の否定ではなくて、判断の对象のできごとが否定的であることをあらわす。すなわち、IT IS POSSIBLE THAT … NOT …、である。そして、CANは論理的に可能である、という判断をあらわしているのに対して、MAYは、(中略)その判断の責任がはなし手にあることをあらわす。(渡辺1989: 237)

と述べている。

では、渡辺による以上の記述を踏まえて、英語の可能表現の表す意味が日本語ではどのようにあらわされるかということ、代表的な可能表現についてみてみよう。

まず、日本語のALETHICな可能性をあらわす代表的な表現形式は、「よめる」などの可能動詞と語彙＝文法的な表現形式の「することができる」であるが、これらは、〈能力〉などの〈ポテンシャルな可能〉も〈実現〉(過去形の場合)もあらわすことができ、英語のCANとBE ABLE TO(do)のような対立はない。

また、可能動詞、「することができる」、「してもいい」は、いずれも、DEONTICな可能性、つまり、社会的なノルマの観点からの許可をあらわすことができ、その点で、英語のCANと共通するが、「してもいい」は、それに加えて、話し手の論理、都合の観点からの許可をあらわすこともでき、その点では、MAYとも共通する。

さらに、EPISTEMIC用法のMAYに対応して、話し手自身の判断による可能性をあらわすのは、「～かもしれない」である。ただし、これは、可能性の表現というよりは、推量の表現(EPISTEMIC MODALITY)である。では、英語のCANのように、論理的な可能性をあらわすことのできる表現形式は日本語に存在するのだろうか。

## 2. 「しうる」とCAN

英語の助動詞CANと同様、日本語の派生動詞「しうる」には、ALETHICとEPISTEMICの両

方の用法がみとめられる。次の2例はALETHICの用法であり、「することができる」にいかえられる。

懐疑が方法であることを理解した者であって初めて独断もまた方法であることを理解し得る。前のことを先ず理解しないで、後のことをのみ主張する者があるとしたら、彼は未だ方法の何物であることを理解しないものである。(人生論ノート)

人は、よしこの猿ほどの智識が無いにもせよ、信ずる力あって、はじめて凡夫も仏の境には到り得る。なんと各々位、合点か。人間と生れた宿世のありがたさを考えて、朝夕念仏を怠り給うな。こう住職は説出したのである。(破戒)

ただし、可能動詞や「することができる」と同様に、次のような実現可能な用法をもつ点は、CANとは異なる。

僕も現代知識人の常として、茶人趣味などにはおよそ無関心なものだが、利休が徳利にも猪口にも生きていることは確かめ得た。美しい器物を創り出す行為を、美しい器物を使用するうちに再発見しようとした、そういうところに利休の美学(妙な言葉だが)があったと言えるなら、それが西洋十九世紀の美学とほとんど正面衝突をする様を、僕の焼き物いじりの経験が教えてくれた。そしてこの奇怪な衝突は、茶人が隣りの隠居となり終った今日でも、しかと経験し得るものなのである。(骨董)

行助は、母が、宇野澄江と矢部行助の立場のちがいを認めていることを、厚子の言葉によって知り得た。彼はそのことを厚子に説明した。(冬の旅)

次は、EPISTEMICの用法の「しうる」およびその否定形式の例である。

「その件に関しては……」

尾島が答えた。

「私の一存ではどうにもならん。私はいわば失格を宣告された社長だから。大畑さんが、その辺はみんなの納得できるような形で処理して下さるから心配はないよ」

「じゃ、人員整理も、夏のボーナスゼロも、あり得るわけなんですね」

伸子がもう一歩踏み込む。尾島もいい加減な答えではごまかせないと分かっただけ。(女社長に乾杯！)

この老人の老先きをどんな運命が待っているのだろうか。この処女の行末をどんな運命が待っているのだろうか。未来は凡て暗い。そこではどんな事でも起り得る。君は二人の寝顔を見つめながらつくづくそう思った。(生れ出づる悩み)

僕は事務室から書類を食堂へ持って来て工場長に判を捺してもらった。だが、敗戦となつては軍関係の被服工場の存続はあり得ない。己斐駅へは行くも行かないも無いのである。(黒い雨)

妻は眉をひそめて、押入の方をふりむいた。あれというのは、私の物語について誰かが話したいといってきたときに、私がよけいな恥をかかなくてもすむようにと、妻が行季の奥深く仕舞っておいた私の一張羅の背広であった。それを質屋に預かってもらえば、きょうだい五人、なんとなく正月気分のする二、三日が送れるはずであった。私は、自分の仕事をすっかり諦めてしまったわけではなかったが、ここ当分、それを必要とするような事態は起こりえないという見当ぐらいはついていた。(帰郷)

渡辺(1989)は、判断を表現するEPISTEMICなCANから頻度・量の表現への移行を指摘している。

助動詞CANが、文のあらゆる対象的な内容が成立する可能性の、はなし手(あるいは、はなしの主人公)による判断を表現する、とすれば、はなし手が、現実のできごとの確認にもとづいて、そのできごとが成立する一般的な可能性を判断して表現するとき、その判断にはことがらが成立する頻度・量の意味・ニュアンスがからんでくる。実際、この助動詞CANは可能性の表現から、さらに、そのことがらが成立する頻度・量的な意味のニュアンスをあらわしながら、現実表現の文にちかづいていく。(渡辺1989: 245-246)

CANのこの用法にあたるものを「しうる」ももつ<sup>(注1)</sup>。

この考え方は三年前でも別に新しかったわけではなく、さらに今では「常識は変り得る」ということすら常識になっているほどであって、本来なら新版を出すに当って、根本から検討し直し、書き改めるべきなのであるが、ひとつの小さな感傷を大切にするために、三年前と同じでよいのではないかと、あえて居直ることにした。(ブンとファン)

肉体と年齢との相関関係にはかなりの個人差があるだろう。職業によっても状況によってもその発現形態は異なってくる。同じボクサーでも、どうしても肉が落ちないということで年齢を感じる場合もあれば、その逆もありうる。内藤は、かつてしたことがないというほどの激しい練習に疲労困憊し、太ることができなくなっていたのだ。(一瞬の夏)

仮にこれをEXISTENTIALの用法と呼ぶならば、英語のCANと日本語の「しうる」とは、ALETHIC、EPISTEMIC、EXISTENTIALの3つの領域の可能性を表現するという共通性をもつことになる。両者の違いは、ALETHICにおける実現可能の用法の有無(CANがなく、「しうる」にある)とDEONTICの用法の有無(CANにあり、「しうる」にない)である。

### 3. 「することもありうる」

可能動詞や「することができる」と「しうる」とのあいだには、かなり明確な役割分担が成立している。「しうる」がALETHICな可能性をあらわすとしても、ほぼ文章語に限られる。可能動詞や「することができる」も文章語に使用できるから、「しうる」は影が薄い。「しうる」の存在価値は、EPISTEMICな可能性やEXISTENTIALな可能性をあらわすことにある。そこでは、「しうる」は、可能動詞や「することができる」とは競合しないからである。金子(1980)も「しうる」がEPISTEMICな意味をあらわすことに注目することの重要性を説いている。ただし、これをいわゆるEPISTEMIC MODALITYの「～かもしれない」と同類とみなすのは無理がある。「～かもしれない」は、否定のスコープに入らない、主観的な推量表現であるが、EPISTEMIC用法の「しうる」は、否定のスコープに入る、〈論理的な可能性〉をあらわす可能表現であって、推量表現ではない。

「しうる」の存在価値がこれらの用法にあるとしても、どのような動詞にもこのかたちがあって、自由に論理的な可能性をあらわせる、というわけではない。無意志動詞や「ありうる」「おこりうる」「生じうる」「なりたちうる」などに限られており、この制限を克服するために、「することもあるうる」という語彙=文法的な表現形式が発達している。この形式は、「しうる」と違って、ALETHICの用法をもたず、もっぱらEPISTEMICおよびEXISTENTIALの用法で使

用される。以下では、「することもあるうる」の用例を観察しながら、それがあらわす可能性の意味について検討していくことにする。

前の節でEXISTENTIAL用法と呼んだものを、宮崎(2014)では、時間的なありか限定の観点から、〈ポテンシャルな可能〉と呼んでいる。これは、実現する時間の限定がない、一般的な法則としてのできごとの実現の可能性・不可能性という意味である。

(あなたの登山の定義では、きのうほくが雄山に登ったことは、登山ではないかも知れません。しかし、ほく自身の登山の定義によれば、きのうの雄山登山は立派な登山です。ほくにとっては、あれぐらいの風はたいしたことには思われないうのです。危険とは感じないのです。山は立って登らねばならないという法則はないでしょう。時によれば、格好は悪いけれど這って登ることだってあり得るでしょう)(孤高の人)

そして突如として米英と戦端を開いて以来、緒戦の相次ぐ戦果は、このすでに老境に達した一人の医師、院長業をもつ医学者を幼児のような昂奮の渦のなかに巻きこんだのであった。少なくとも彼は戦争には勝負があり、負けることもあり得るということを知ってはいた。(楡家の人びと)

「つまり、その土地と深く係わりを持たないうちは、無責任に愛してられるんですね。その典型は、旅人、つまり観光客なんです。しかし、愛してだけられるのは、その土地について、何も責任がないからなんだ。本当にその土地に住んで、その土地の人と商売をしたり、一緒に何か仕事やったりすると、必ず、相手を憎むようになって来る。憎みながら愛する、愛しながら憎む、どっちでもいいんですけど、そうならなきゃ、本当にその土地とその人とのつながりが出来たことにはならない。だから小母さんは、本当にこの土地に住んだったという資格ができたんです」

「へえ、そういうもんかしら」

「少なくとも、僕たちが、将来、やる仕事の分野ではそうだと思います。只、ほめてだけいるなんてことは、あり得ないし、もしあったら、その人はその土地について、現実に見てない証拠だと思えます」

「いっぱしなことを言うわね。太郎ちゃんも」

「そうよ、この子は、口が一番達者なの」(太郎物語・大学編)

衛生兵が軍医を呼びにくるのは、病人の脈がいよいよ結滞してきた間際である。強心剤を打ち葡萄糖液を注射してやると、あるかないかだった脈がある程度持ち直す。けれどもそれはほんの瞬間のことであり、その治療は文字通りの形式にすぎなかった。真の栄養失調者はいくらビタミン剤を与え葡萄糖を与えても回復することはあり得ないということ、峻一たちはさんざ体験させられ匙を投げていた。(楡家の人びと)

この用法の「することもありうる」には、肯定形式と否定形式があるが、ポテンシャルであるから、基本的に過去形(「ありえた」)はなく、動詞は不定形の「する」に固定されている。時間的なありか限定の観点からすれば、いわゆる〈能力可能〉と同等であり、上記のような文法的な特徴は、能力可能をあらわす「することができる」と同じである。ただし、「という」がしばしば介在する点は「することができる」とは異なる。否定形式では、ありえなさを強調する意味で「など」を加えるときは、「という」は必須である。「ような」が介在する場合もある。

意外な展開に、計量室の中は静まり返った。ここまできて試合ができないとは何ということだろう。体重が多すぎて試合が流れるということはあるうるが、少なすぎてできないなどということがあるのだろうか。いや、あるにしても、どうして体重に下限があるということを、プロモーターは徹底しておいてくれなかったのだろうか。(一瞬の夏)

私は金閣がその美をいつわって、何か別のものに化けているのではないかと思った。美が自分を護るために、人の目をたぶらかすということはあるうることである。もっと金閣に接近して、私の目に醜く感じ



られる障害を取除き、一つ一つの細部を点検し、美の核心をこの目で見なければならぬ。私が目に見える美をしか信じなかった以上、この態度は当然である。(金閣寺)

一方、パラケルススも後世から見れば随分とおかしな論議を行なっているものの、また特別の秘油とか一角獣の角などという処方連発したもの、多くの観察と考察をなし、『悟性を奪う疾患について』を著わした。その中で彼は言っている。「聖なる舞踏病」はなにも天使が起すものではない、なんとなれば天使が疾病を作るなどということはありませんからである……。(楡家の人びと)

それから私はひとつの仮説を未紀に説明したことをおぼえている。それは、セックスとは自分の存在を他の存在に接合しようという欲求である、という定義から出発する。ここで他の存在といっても、亀がライオンと接合するようなことはありえない。少くとも他の存在のなかに自分をみいだすことができなければならない。これはこの接合のネガティブな条件といえるだろう。(聖少女)

なりたつ時間の限定のない、一般的・法則的なできごとをえがきだしているの、以上の例のように、多くの場合、主体や客体は一般化されている。しかし、否定形式の例には、主体が個別的・具体的なものもある(最初の例は、「自分の家」が主体であると考えた)。

そして、そこで暫く、あちこちの棚に飾られているものの品さだめをしていると、女中さんが、洋菓子と紅茶を持って来てくれた。

「ちょうどおやつだ。いいタイミングだな」

太郎は言った。自分の家ではこういうふうに、魔法の如く、お茶のでて来ることなんてあり得ない、と太郎は思っていた。(太郎物語・高校編)

看護婦達は感付いているのであろうか。彼女等が感じるとしたら、一夜男客と遅くまで話し合っていたということと、翌朝、着物の袖口を繕ってやったことくらいである。それくらいで志方との間を疑うだろうか。

家の先生にかぎってと使用人達は思っているようである。

男を論破することはあっても隙をみせたり、弱くなることはない。まして愛を感じるなどということはありません。たしかに色恋沙汰は卒えたつもりだった。久しぶりの男客を歓待したがそれは教会のお友達というだけでそれ以上のものではなかった。(花埋み)

私の身体は世の中の物のうち私の思想が変化することのできるものである。想像の病気は実際の病気になることができる。他の物においては私の仮定が物の秩序を乱すことはあり得ないのに。何よりも自分の身体に関する恐怖を遠ざけねばならぬ。恐怖は効果のない動揺を生ずるだけであり、そして思案はつねに恐怖を増すであろう。(人生論ノート)

この用法の「することもありうる」「することはありえない」をEXISTENTIALとみなす根拠として、〈反復性〉をあらわす「ことがある」や否定形式の「ことはない」にいかえられるということがある。

戦争には勝負があり、負けることもあり得る≡負けることがある

真の栄養失調者はいくらビタミン剤を与え葡萄糖を与えても回復することはあり得ない≡回復することはない

たしかに、〈ポテンシャルな可能〉をあらわす「することもありうる」から「ことがある」へのいいかえは幅広くなりたつのだが、その逆はなりたないことも少なくない。「彼はときどき映画を見に行くことがある」のような典型的な〈反復性〉をあらわす「ことがある」が「する

こともありうる」にいいかえられないのである。また、「荷物が明日届くこともありうる」のような〈アクチュアルな可能〉をあらわす「こともありうる」(後述)は「することができる」にいいかえられない。

「こともありうる」にEXISTENTIALとEPISTEMICの用法をみとめることができるとしても、典型的な意味でのEXISTENTIAL MODALITYやEPISTEMIC MODALITYをあらわすわけではない。あくまでも〈論理的な可能性〉をあらわすことが基本であって、それが時間的なありか限定の観点から、〈ポテンシャルな可能〉と〈アクチュアルな可能〉に分化しているとみたほうがよいと考える。そして、「することができる」と同様、〈ポテンシャルな可能〉がより基本的な意味であろう。

続いて、EPISTEMIC用法にあたるものをみる。筆者はこれを〈アクチュアルな可能〉と呼んでいる。以下に、その用例をあげる。否定形式の例や「という」が介在した例もまとめてあげる。

もしも彼が、登美子の産んだ子の父であることを否定したら、問題はどうか。民法第七百七十四条には、(夫は、子が嫡出であることを否認することができる)と規定されている。法律上の夫でさえも否認権はあるのだ。それほどに父という立場は不確実なものにすぎない。法律的には赤の他人であるところの彼が、登美子の産んだ子を否認することは、当然あり得る筈だ。(青春の蹉跎)

場所は初め、大臣官邸という話だったのを、実松秘書官が、「それだけは止めていただきたい」と言い張ったため、航空本部の地下に共済組合の診療所がある、其処を使うこととし、実験は、数日間にわたって、或は徹夜になることもあり得るということであったが、徹夜なら山本は平気である。みんなのために、夜食の鮓など大きな鮓桶に山盛り用意させて、熱心なものであった。(山本五十六)

光秀は、先兵隊長として一軍のさきをを進め、といった。その目的は、この一軍のなかで光秀の意図に気づき抜け駆けして本能寺へ内応する者があるかもしれない。また行軍の途次、在郷の者が時ならぬ大軍の行軍をあやしめ、本能寺へ速報することもありうる。それらをふせぐためであった。(国盗り物語)

やみくろがいったいどういうものなのか私には見当もつかないが、記号士たちがもし何かの勢力と手をつないだのだとしたら、それは私にとっても非常に具合の悪いことになるはずである。というのは我々と記号士たちはただでさえきわめてデリケートなバランスをとって拮抗しているから、ちょっとした作用で何もかもがひっくりかえってしまうということだってあり得るのだ。だいいち私がやみくろのことを知らないのに連中が知っているというだけで、既にバランスは狂ってしまっているわけだ。(世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)

「でも、僕は始め、午後六時まで働くという約束だったんだけど。超過した分だけ、割ましをしてくれる事はありえないし」(死者の奢り)

加藤は新雪の中を奥穂に向かって歩き出した。日が高く登ると、風が出るだろう。眼もくらむような飛雪が、酒沢の盆地を襲うだろう。その中を、彼は、稜線に向かって登り、奥穂への難所では、ピッケルをふるって氷盤にステップをきざまねばならないだろう。

(そして今宵はどこに寝ることになるのだろうか)

おそらく野宿だろう。

だが、加藤はその野宿をおそれてはいなかった。彼は今、一つの画期的な実験を終ったばかりであった。(体力に充分な余裕を持たせた状態で野宿に入るならば、たとえ眠っても、寒さに負けて死ぬことはあり得ない)

眠ったら死ぬというのは、疲労困憊している状態のことであって、疲れてもいないし、食糧も充分あるというときには、ツェルトザック一枚で雪の中に寝ても死ぬことはないのだ。(孤高の人)

加藤は花子が、その父の遺言をどのような形で加藤に押しつけて来ようとも、それだけはむずかしいだろうと思った。山を除いたら、自分はない。なぜそうなのか加藤にはわからない。だが山以上に彼を引き

つけるなにかが、花子との結婚によって生ずる以外、父が願っている人並みの人間になることはあり得ないと思った。(孤高の人)

しかし恋にもいろいろある。一概には云えない。この小説の主人公は杉子と結婚しなかった為<sup>に</sup>他の女と結婚したろう。そして子が生れたろう。その子が男で、大宮と杉子の間に出来た女の子を恋して結婚するということも考えられないことではない。そして両方がお互に生れたことを感謝しあうと云うこともあり得ないことではない。(友情)

〈アクチュアルな可能〉をあらわすこれらの例は、未来における具体的なできごとの実現の可能性があること・ないことをあらわしている。肯定形式の例だけをみると、あたかも「するかもしれない」と同じように〈推量〉をあらわしているようにみえるかもしれないが、こうした「することもありうる」には、肯定・否定の対立も、テンス対立もあり、下の例のように、過去形(「ありえた」のほか、「ありうることだった」もふくめておく)をとって、過去において実現する可能性があったこと・なかったことをあらわすこともできるのである。

その栄さんが又互の生活のなかでは、そういう場面に登場するので愈々現実の条件がそろい、じゃ、いつかから見えないって云っていた縞の、ね、あれかもしれない、と私は電話口でその時分の人出入りも激しかった暮しの姿を思いおこした。その頃なら私が知らないその旭町とかに私の著物が運ばれてゆくこともあり得たのであった。(まちがい)

伸子のはらはらする気持は、多計代をジュネヴ行の列車の車室にかけさせてしまうまで、休まらなかった。みんなが気をそろえて、天気の良いことにはふれなくて自分をたたせようとしている。そこにこだわって、多計代がおこりだすことはあり得たし、そうやって多計代がおこれば、伸子は自分として何と云いつくろうのか知らなかった。浴室へゆく廊下で泰造のああ云った言葉がなければ、伸子は、母の顔を見た最初に、あいにく雨ね、というたちなのだったから。(道標)

一日々々とむなしく待ちましたが、水島の姿は見えませんでした。その消息すらありませんでした。はたしてあの三角山に行きついたものやら、はたして決死の人々を説得して首尾よく無駄死から救ったものやら——、さっぱり分かりませんでした。われわれは、水島のことだからきつとまよくやる、とたやすく思いこんでいたのですが、考えてみればこれは大へんな難役でした。どこまでも戦いぬくと決心して立てこもっている人々に、うっかり降伏をすすめたりすれば、かえってその味方から一刀のもとに切られることも、十分にありうることでした。(ピルマの堅琴)

「加藤文太郎か」

加藤が研修所の事務室に入ると、影村一夫と話していた男がいきなりふりかえっていった。眼つきのよくない男だった。

「ついて来るがいい、逃げようたつてもうどうにもならないんだ、おとなしく署までついて来るがいい」

加藤は、そうなることを全然予期しないでもなかった。金川義助との交友が、疑われる原因になることはありうることだったが、なんの釈明もさせずに警察へ引張っていくのは無法に思われた。(孤高の人)

叔母は恨みがましくそうだったが、私はすでに兄たちのことはあきらめていた。長兄文蔵が死の旅へ出てから二十年、次兄卓治が背信の旅へ出てから七年であった。その間、どちらからも音信がなく、生死不明であったけれども、たとえどこかで生きていて父の瀕死を知ったとしても、彼等の性格から推して、いまさらおめおめと帰宅することはありえなかった。(恥の譜)

春の気配が迫っていた。七瀬と「彼」は逢い続けていた。尾上が消えて以来七瀬はもう「彼」の学年末試験のことを心配しなくなっていた。「意志」が「彼」に落着点をとらせることなどあり得なかった。間違いなく「彼」は一流大学へ進むであろうと七瀬は信じた。「彼」ほどの知力と精神力があれば点取り虫にならずとも一流大学へ入る資格は充分ある筈だと、最良目でなく七瀬は思った。非人間的な詰め込み教育を身近に見て反撥を感じていたせいもある。(エディプスの恋人)

私の行く先々に、私が行くために、野火が起るといふことはあり得なかった。一兵士たる私の位置と、



野火を起すという作業の社会性を比べてみれば、それは明らかであった。私は孤独な歩行者として選んだコースの偶然によって、順々に見たにすぎない。（野火）

それでいて、轟くような大声で話す和尚には、私の心にひびくやさしさがある。世の常のやさしさではなくて、村のはずれの、旅人に木蔭の憩いを与える大樹の荒々しい根方のようなやさしさである。ごく手ぎわりの粗いやさしさである。話すほどに、私は今夜という今夜、自分の決心がこういう優しさに触れて鈍ることを警戒した。すると又しても、老師がわざわざ私のために和尚を招いたのではないかという疑いが湧いたが、私のために福井県から和尚の上洛をたのむなどということはありません。和尚は奇妙な偶然の客、この上もない破局の証人にすぎなかった。（金閣寺）

以上のような「することもありうる」のあらゆる可能性の意味は、EPISTEMIC用法のCANのあらゆる可能性の意味によく対応している。否定のスコープに入るという点も共通である。しかし、決定的な違いもある。渡辺(1989)には、EPISTEMIC用法のCANのあとの動詞の形態とできごとの時間の関係について、次のような記述がある。

ここでは、助動詞CANは、その判断の時点が現在であれば、現在形can、過去であれば、過去形couldの形式をとる。あるいは、過去形couldの形であっても、現在の判断が仮定性の意味・ニュアンスをともなっていて、そのできごとの成立の可能性がすくないことをあらわしていることもある。そして、判断の対象である、文の対象的な内容が、判断の時点からみて、現在・未来の時間のできごと、すなわち、判断の時点とおなじ時間のできごと、あるいは、後のできごとに対しておこなう判断であれば、動詞は普通形の形式をとって、判断の時点に先行する時間のできごとであれば、助動詞につづく動詞は完了形の形式をとる。（渡辺1989: 243）

ここで注目したいのは、CANの場合、動詞にはテンスがあり、現在形か完了形かできごとの時間があらわしわけられるのに対して、「することもありうる」の「する」が継続相や過去形になることはほとんどないという事実である。手元の資料には、次のような「していることもありうる」の用例が1例見つかったが、一般的ではないだろう<sup>(注2)</sup>。

愛はありえない。彼女が俺を愛していると思っているのも錯覚だし、俺が彼女を愛していることもありえない。そこで俺はくりかえし言った。「愛していない」と。（金閣寺）

動詞のテンスに関する、CANと「することもありうる」のこうした相違はどのように理解したらよいのだろうか。これを考える手がかりをえるために、「することもありうる」の類義表現の「する可能性がある」に目をむけてみよう。

「する可能性がある」は、「することもありうる」とは違って、「している可能性がある」「した可能性がある」のように、動詞が現在形も過去形もとることができる。

林浩は現在鹿児島県屋久島に健在で、魚屋商売のかたわら一湊の消防団長をつとめている。島ではよく知られたなかなかの人望家で、当時の「航空記録」も保存しているが、二十六年の歳月の間にその記憶に誤りが混入して来ている可能性はあろう。（山本五十六）

もっとも、市川大尉の聯隊砲中隊だけでなく、ほかの陸軍部隊からも捜索隊が出た可能性はある。密林の中の苦しい捜索行をみなが熱心に希望したのは、墜落した敵機を見つけると、コーンビーフ、チョコレート

トその他の食糧、拳銃その他の武器が手に入るからであった。(山本五十六)

「する可能性がある」がEPISTEMIC MODALITYでないことは明らかである。これ自体が過去形になり、否定のスコープにも入る。その点では、「することもありうる」も同じである。では、動詞のテンスの有無といった両者の違いは何を意味しているのだろうか。

「した可能性がある」というかたちは、過去にできごとが実現した可能性を今確認するという意味をあらわす。その時点からみて未来にできごとが実現する可能性が過去にあったという意味をあらわそうとすれば、「する可能性があった」というかたちをえらぶことになる。このように、できごとの実現する時間とその可能性を確認する時間とをわけてあらわすために、動詞のテンスが必要になるのである。

加藤は二階へ行って、窓から外へ出て、雪の降り方を観察した。雪片が大きくなっていた。本格的な雪降りになる可能性があった。槍平へおりとすれば急ぐ必要があった。あるていど積ると、新雪なだれが起きやすくなる。(孤高の人)

動詞がテンスをもたない「することもありうる」の時間構造はこのようなものではないということになる。それは、むしろ、ALETHICな可能性をあらわす「することができる」(これも「したことができる」というかたちをもたない)と同じものであると考えられる。次は、〈アクチュアルな可能〉をあらわす「することができる」の例である。

私は明日なら行くことができる。  
私は今なら行くことができる。  
私はそのときなら行くこともできた。

これらは、実現の可能性が、未来、現在、過去に存在することをあらわしている。ここには、そのできごとの実現が可能な時間があるのみである。〈アクチュアルな可能〉をあらわす「することもありうる」の時間構造もこれと並行すると考えられる。

明日彼が来ることもありうる。  
今彼が来ることもありうる。  
そのとき彼が来ることもありえた。

〈ポテンシャルな可能〉をあらわす「することもありうる」にふくまれる「する」は不定形である。と前に述べたが、このように考えるなら、〈アクチュアルな可能〉をあらわす「することもありうる」にふくまれる「する」もまた不定形であるということになる。

#### 4. 過去のできごとの論理的な可能性

「することもありうる」の用例には、以上にとりあげたものとは、テンス的な性質が明らかに異なるものがある。

それにしても、このばあやが未紀の父をパパとよぶのは異様なことだった。未紀が日ごろ父をパパとよんでいたとすると、未紀の乳母(?)のような立場にいるばあやまでも、未紀と一体化してパパというよびかたを慣用することはありうる。だがぼくが未紀のノートからえがいた彼女の父は、田舎者の実業家で、子どもからパパとよばれるのに似つかわしい男ではない。なぜかぼくは、アンボのころぼくらのL I Cに資金を援助してくれたある中小企業のおやじの風貌を、未紀の父のそれに重ねてしまうのだ。(聖少女)

「なるほど、河西を待合室に待たせた理由はそれでわかった。福岡署にはそのように依頼しよう。しかし、東京から安田自身が打たなくても、誰か、依頼をうけた代人が打つ、ということもありうるぜ」(点と線)

しかし、安田が小樽から乗車することはありえない。なぜなら、そうなると《まりも》より前に函館をたち、小樽に到着していることが絶対に必要である。時間の連絡から考えて、そのことがありえようか。(点と線)

二十一日の十一時ごろというと、東京・札幌間が普通で配達まで二時間を要するとして、朝の九時ごろに打ったことになる。その時刻は、安田は板付を発した飛行機の中だ。おそらく広島県が岡山県の上空を飛んでいるところであろう。安田自身が東京から打つことはありえない。(点と線)

これらの例があらわすできごとは、文脈がなければ、いつのことかわからないが、文脈から、「ありうる」「ありえない」と判断している時点からみて) 現在や過去のことであるとわかる。話し手(作中人物)が場面のなかでその可能性があること・ないことを判断している。したがって、「している可能性がある」「した可能性がある」「した可能性はない」に近づいているといえるが、あいかわらず、動詞には「する」という不定形があらわれている。不定形でも問題ないのは、ここでは、時間よりも、論理的に可能であるか否か(ありうるか・ありえないか)という判断に焦点があたっているからであろう。

上の2つめの例には「という」が介在しているが、「という」を介することによって、次の例のように、過去形の動詞もあらわれるようになる。ただし、この例も、「誰の目にもとまらないなどということありえない」のように、非過去形でも問題ないだろう。

そこで、彼は、わざと行方を告げずに、しばらく一人旅に出ることを、いきなり手紙で知らせてやることにしたわけだ。同僚たちに、あれほど効果のあった休暇の秘密が、あいつにだけは、無効であったりするはずがない。だが、宛名を書き、切手まではったものの、いざとなるとさすがに馬鹿らしく、そのまま机の上にはうり出して来てしまった。

その無邪気ないたずらが、結果としては、持主にしか開けられない、盗難防止装置付きの自動錠の役目をするようになってしまったのだ。あの手紙が、誰の目にもとまらなかったなどと言うことはありえない。まるで、逃亡が自分の意志であることの声明書を、わざわざ残してきたようなものである。(砂の女)

だが、次の例は、非過去形の「知っている」にすることはできない。他のできごととの時間関係がくずれてしまうからであろう。

「逃げたの？ 林君が？」

「そうなの。あれがちょっとショックで」

伸子は、紅茶へミルクを入れて、ゆっくりかき混ぜながら、考え込んでいた。

「林君が……あの殺された女——三好晃子を知ってた、っていうことがあり得るかしら？」

と伸子は呟いた。

「分からないわ。私は全然林君のことを前には知らないんだもの」

「そうね。——私だって、ずっと一緒にいたわけじゃなし、林君が——というより、あの三好晃子が林君を何かで知って、遊び相手にしていたとすれば……」（女社長に乾杯！）

論理的な可能性の検討の対象となるできごとの範囲は、過去にリアルに存在していた、あるいは現在もリアルに存在しているできごとにも及ぶ。ほとんどの場合、否定か疑問の形式となり、受け入れがたさが表明される。また、それを強調するために、「など」「なんて」をしばしばともなう。

ものごとの進み具合がどうもおかしい。記号士たちのやりくちなら、私はよく知っている。彼らは何かをやるつもりなら、全力を尽してとことんやるのだ。中途半端なガス屋を買収したり、狙った相手の見張りを怠ったりすることなんて、まずありえないのだ。彼らはいつもいちばん素速くいちばん正確な方法を選んで、ためらわずにそれを実行する。（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

理性をとり戻したかった。もう、以前の理性は自分の中にはないのか、そう思い、七瀬はつくづく情けなかった。「彼」のことを頭から追い出そうとして七瀬は泣きながら強く頭部を壁に叩きつけた。何度も、何度も、全身の力をこめて叩きつけた。だが、そんなことをしながらも、いっそのこと「彼」のいるマンションの近くまで行き、せめて「彼」の意識を遠くからでも感応していようか、などと考えている自分に気がついてかっとなら上り、お前はまだこりないのか、これでもか、これでもかと口走り、わあわあ泣きながらさらに強く壁に頭を叩きつけるのだった。もう以前の自分ではない、と七瀬は思った。理性的だった七瀬という娘はどこかへ行ってしまったのだ、と彼女は思った。しかし、あれほど理性的だった人間がこんなにまで錯乱するなどということがあり得るのだろうか。とても現実とは思えない。これはにせものの現実だ。（エディプスの恋人）

論理的な可能性の検討の対象となるできごとが前後の文脈のなかにしめされている場合もある。それが指示語でさししめされる場合もある。話し手（作中人物）の心のなかにある場合もあるだろう。

「いや、本当だよ。また試合をするんだそうだ」

少しむきになって彼は言った。

ありえない、どう考えてもありえない、と私は思った。

カシアス内藤がリングを離れてから四年以上にもなる。ボクサーにとって四年の空白は絶望的なものではなくである。（一瞬の夏）

あのフォアマンがノックアウトで敗れてしまったのだ。こんなことがありうるのだろうか。その寸前まで、追われ、打たれ、喘いでいたア리가、一瞬にしてフォアマンを打ち伏せてしまった……。私は茫然と画面を眺めていた。（一瞬の夏）

しかし彼の頭のなかにひらめくような疑問の影があった。登美子を診察した二人の産婦人科医の診断と、江藤の記憶とのあいだに喰い違いがあったこと……。彼の記憶からすれば登美子は妊娠七カ月ぐらいになっているか、それとも三カ月あまりであるか。そのどちらかでなくてはならない筈だった。ところが事実は六カ月未満であった。その喰い違いと、胎児の血液型とは、何を意味しているのか。

江藤は茫然として、頭がしびれたようになっていた。だって登美子はあんなにおれを愛していたのだ。有り得ない事ではないか。……しかしまた、ずっと前に彼が感じた小さな疑いが、記憶の片隅から浮びあがって来た。(青春の蹉跎)

次にあげる例では、「あってはならない」「許されない」といった評価的ニュアンスをともなっている。ここでの論理は、常識、社会規範、倫理にもとづいている。

はじめ、信夫はこんな不人情な話があるだろうかと思った。強盗におそわれて、半死半生の目にあっているけが人を助けられないなどということは、あり得ないことに思われた。(塩狩峠)

「でも、どなた様が、殿をおきらいあそばしております」

「まず、母上だ」

と、信長はいった。

濃姫はもう驚くのは馴れてしまって、

(そう、おかあさまが。——)

と、なにげなくうなずき、うなずいてからその異常な事柄にがく然とした。実の母が、わが子をきらったり殺そうとしたりすることが世にありうるだろうか。(国盗り物語)

だが、それにしても、ありえないことだ。あまりにも常軌を逸した出来事だ。ちゃんとした戸籍をもち、職業につき、税金をおさめていれば、医療保険証も持っている、一人前の人間を、まるで鼠か昆虫みたいに、わなにかけて捕えるなどということが、許されていいものだろうか。信じられない。おそらく何かの誤解なのだ、誤解にきまっている。誤解とでもいうよりほかに、考えようがない。(砂の女)

「ありえない」と評価する理由は、文脈のなかにあらわれている場合もあれば、読み手の常識にまかされる場合もあり、また、最後の3つの例のように、評価の対象となるできごとのなかに一般化されて説明されている場合もある。

## 注

- 1 金子(1980)は、「「認識の可能」をあらわすばあいの第三形式(筆者注:「しうる」のこと)はしばしば「くりかえしのすがた(sporadic aspect)」をあらわすために機能しているようにみえることがある」と述べている。
- 2 BCCWJで検索してみると、「したこともありうる」の例もいくつか見つかるが、自然とはいえない。ただし、「定価には消費税が含まれていることもありうる」のように、〈ポテンシャルな可能〉をあらわす「していることもありうる」の例は自然である。

## 参考文献

- 奥田靖雄(1986)「現実・可能・必然(上)」『ことばの科学1』むぎ書房  
 奥田靖雄(1996)「現実・可能・必然(中)」『ことばの科学7』むぎ書房  
 金子尚一(1980)「可能表現の形式と意味(I) — “ちからの可能”と“認識の可能”について—」『紀要』23(共立女子短期大学(文科))  
 工藤 浩(1989)「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』39  
 澤田治美(2006)『モダリティ』開拓社  
 仁田義雄(1981)「可能性・蓋然性を表す擬似ムード」『国語と国文学』58-5  
 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探究』くろしお出版  
 宮崎和人(2004)「反復性と可能性—現代日本語のスルコトガルー—」『KLS』24  
 宮崎和人(2013)「モダリティとしての〈可能〉—リアリティーと時間的な意味とのからみあい—」『岡山大学文学部紀要』59



- 宮崎和人(2014)「ポテンシャルな可能・アクチュアルな可能と認識的な可能性」『岡山大学文学部紀要』62
- 森山卓郎(2002)「可能性とその周辺—「かねない」「あり得る」「可能性がある」等の迂言的表現と「かもしれない」—」『日本語学』21-2
- 渡辺慎悟(1989)「英語のモーダルな助動詞CANについて」『ことばの科学3』むぎ書房
- Bybee, J., R. Perkins, and W. Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. University of Chicago Press.
- Palmer, F. R.(2001)*Mood and Modality, 2nd ed.* Cambridge University Press.

#### 付記

本稿は、平成27年度科学研究費補助金基盤研究(C)「現実性の概念にもとづく日本語モダリティー論の新展開」の研究成果の一部である。